春之伊

再版

董作賓

行く春

薄田泣菫

この卷を世に出すにあたりて何の言はんとする所あらず。『ゆく春』はまことに野にふさはしき調のみ。唯歌うて感情をいつはらざりしを喜ぶなり。

挿畫は滿谷國四郎君、輪廓は松尾素濤君の筆になれり。こゝに舊友ふたりの厚意を謝す。

目次

牧笛……二
夕暮海邊に立ちて……二五
夕の歌……三〇
暗夜樹蔭にたちて……三五
鐵幹君に酬ゆ……四一
小鼠に與ふ……五一
低唱……五七
さまよひ……六〇
夢路の關守……六四
沙彌がうたへる歌……六七
絶句
小狐……七一
泉……七三
桃園……七五
惡緣……七七
伶人の歎……七九
遣愁……八一
遠情……八三
遺憤ノ首
一、狐に巣な〜と誰かいふや……八六

二、亟相何とて無禮なるや……八八
三、粘土の子凍りて息は無きに……九一
四、願ふは清狂市にゆきて……九三
五、曉若もの鋤をふりて……九六
六、夕暮賤の男門にたちて……九八
七、僞善者來れり蠟を塗りて……一〇〇
八、昨夕は山田に水をそゝぎ……一〇三
九、夕飯のむゝろに瓶子そへて……一〇五
罪……一〇八
うたげ……一一一
戀の矢……一一四
夏の白晝……一一七
謎……一二〇
歡聲……一二三
あゝ杜國（絶句十篇）
一、類なき似而非者チエンバレンの……一二六
二、不毛國拓いて百合を植うる……一二八
三、議會に立ちたるクルウゲルの……一三〇
四、この國富めるの故を以て……一三三
五、一語に答へて足りぬべくば……一三五
六、死の手に延かれて去るといふ……一三七
七、白髯丈あるジュウベルトの……一三九

八、大風船吹く海を超へて……一四一
九、海神願はく肩を垂れて……一四三
十、地圖ひく人の子心あらば……一四六
巖頭沈吟
一、なげきの卷……一五一
二、のろひの卷……一六三
破甕の賦……一七六
鶯と蝙蝠……一八一
郭公の賦……一八四
野にたちて……一九二
金絲雀を放つ歌……一九六
『南畝の人』の小引……二〇一
石彫獅子の賦……二一〇

挿畫目次

滿谷國四郎筆

牧笛……二
泉……七四
巖頭沈吟……一五〇
石彫獅子……二一〇

ゆく春

泣菫

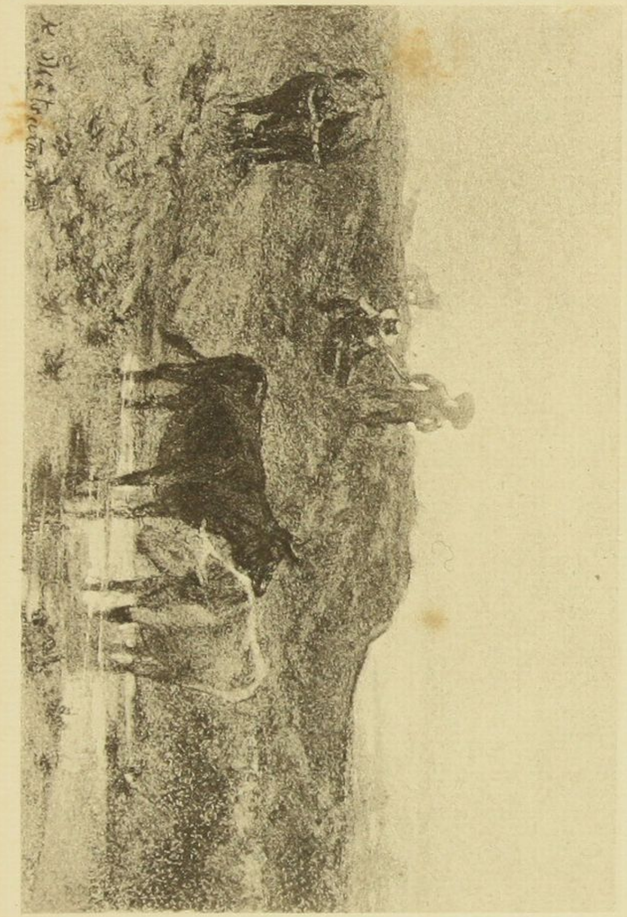
牧笛

與作

君柏の樹のかげに坐し、
根白の葦の莖吹いて、
竟宴に無き清き音を、
牧場の空に響かしむ。
澄める水面の花菖蒲、
沼に尋ある根は延きぬ。
誰に得たりや、一節は
樂所に馴れし律にあらず。

吾作

去年長月の祭の日、
白晝小山の森に入り、
瑠璃囀するに聞、惚れて、
吹く術得きと君は言ふ。



吾は渇ける牛ひきて、
谿の流れに下りゆき、
石走り鳴る音に似せて、
この一節は做ひ得たり。

與作

されば や、君が傳ふるは、
風吹く蘆の葉の響、
羽ある神の白き齒に

笛觸るゝやと疑はる。

姿單一の世に倦みて
憂ある身ぞ、慰めに、
日の暮るゝまで笛吹きて、
牧場の群は問はずあれや。

吾作

歌口噛みて友の身の

長き愁をなだめ得ば、
終日山毛欅の樹に凭りて
息絶ゆる迄吹かんもの。

吾には甘き小壺より、
君は苦きを味ひぬ。
愁ひとするを現はして、
友の慰籍を買ふとなせよ。

與作

日暮れて家に還る路、
葉守の神の蠱術に
とる曳杖を失ひて、
足悩む阪の夕迷ひ。

里なつき來る山男、
手がらみ森に凭るを見て、

誰か恐怖と寂寞の
領ずる野邊を踈まざるや。

吾作

さはれ木の闇、罔象女、
身を童體に變化して、
さゞめき更す勸盃の
快樂見る夜の忍び足、

知るや不覺に聲たてゝ、
下座の小兵に怪まれ、
小走り門をくゞるまで、
笑ひ崩るゝ可笑さを。

與作

君が優しき本性は、
小闇き森の物の怪の

猶可笑味を現ずるや。

母の胸より産れし夜、
星は就れにかゝりしか、
吾は『現在』にし慊らず、
新なる日を願ふのみぞ。

吾作

深野の露の朝ドめり、

圓き踵のぬるゝ路、
犢牛小躍り岡越えて、
朝日さす野へ飛ぶ風よ。

旅商人の額に見る、
眉のひそみも開かんを、
日頃親しむ君にして、
こゝに平和を認めざるや。

與作

よしや平和の名は得ざれ、
野に路迷ふ牛飼の
誇るに足らぬ務めより、
猶目覺しき世は無きか。

才ある友と名ある子と、
訴を解する女子の
趣きあるを買はんには、
寧ろ手飼も惜まざりな。

吾作

甘き泉に走る日も、
笛の音聞けば歸るもの、
今、商人の無慈悲なる
軛を君や敢てする。

眞實人すてゝ色白の
若きに嫁きし婦は有り。
檻を破りて野の路に、
主人を踏みし牛はありや。

與作

見よ墾路の柳かげ、
旅人ふたり急ぎ去る。
行方は市路、白壁の
青葉隱れに見ゆる方。

あゝ世の榮は市にあれ、
伽藍、學び舍、新館、
才と掛想と歡樂の
全き屯ぞ其處に見るよ。

吾作

市か。牛追ふ鞭の緒に、

花の芳き香を嗅がんより、
蛇の尾捲くも曳杖に、
家の子めくを撰るや君。

牛は泉の縁に往き、
夢は倦んずる胸に入る。
暫し樹蔭に君も伏せ、
牧場はひとり守る可きに。

與作

夢は優しき額をこそ、
和かき手に抱きよれ。
動ずる胸に捲くばかり、
性質猛なる身ならずよ。

唯野に屈む忍び泣き、
薊の花の紅の

涙に濡れし色を見て、
胸の憂ひを遣らしめよ。

吾作

陋這ふ日影飛び移り
古き精舍の甍射り、
軈て虚空に消えゆきて、
遥かに雲の色染めぬ。

今巡禮は空を見て、
旅の愁ひを知る時か。
あはれ犢牛を櫃に入れ
君も夕の乳絞らずや。

與作

絞る乳の澱練られては、
白帆に載りて海に浮き、
入洛、薔薇の花園や、

母に凭る兒の齒に吸はる。

あゝ靜かなる春の宵、
都誇りの人も來て、
可笑味多き世語りに、
憂なぐさむる事も有れや。

吾作

去歳都路の旅の子が、
紅葉のかげに逍遙し、
日暮れて路も忘れしに、
宿せと乞ひし宵の闇。

燭とりて絞る白き乳の
襟に散る香を妻に問はれ、
答ありやと斷はりて、
閨踏ませしは誰が子なりし。

與作

惑ひ泣く日ぞ、和かき
人の言葉の嬉しきや、
神に感謝す、過失に
猶笑ましむる友あるを。

夕暮牛は歸り來て、
小舍の邊りに集りぬ、

君と離れて世の路の
荊棘の垣は踏むとせじな。

吾作

あれ柔和なる目をあげて
小路に待てる群を見よ、
靜けき暮の空の下、
斯る有情を誰に知る。

いざ笛帶びて、踏み馴れし、
野路を左に往かしめよ。
翌日は柳の樹の蔭に、
また清き音を響かしむ可く。

夕暮海邊に立ちて

直黃、丹摺、紫の
雲藍色に收まり、
日の影徐かに薄れ行けば、
黃金浮けし波の穗の
搖ぎも底に隱ろひ、
小兵の星のみくゞり出でゝ

遠き空に光る外、
夜の幕全く空を閉ぢぬ。

島姫宿る巖陰、
流れ綏き淵の上、
倦ずるかひなに揖をとりて、
白く光る鱗の
跳ねかへる音を聞きつゝ、
今漕ぎ歸るか蜑の子らは、

闇き浪路の夕暮、
わが岸何れと惑ふらんよ。

磯邊に立てる荒屋、
童女は早く眠りて、
女房厨屋に隙や得たる、
形よき貝の火盤を、
南の窓に點ドて、
舟漕ぐ目路にと輕くすゑぬ。

渇仰あつき比丘尼の、
法會にともせる燭の如く。

夜次第に擴がりて、
引汐走る音のみ
眞闇に知らるゝ海のかなた、
白き手すがる戸の上、
低き光の目標、
船人かへると思ひやれば、

胸に泌み入る平和に、
おぼえず涙を巖に垂れぬ。

夕の歌

巡禮にたちたる子を思ひて
母のよめる

夕となりぬ、日暮れぬ、
黄雲細く旗捲けば、
天路に逼りし影も落ちて、
晝の務め地をば去り、
次いで來たる闇き夜の
小姓か、金星近く降り、
繼子門に凭る如く。
目尻もうるみて此處をまもる。
日暮は人を痛めて、
野の旅路を思はしむ。
吾子は巡禮、遠く行きて
消息得ざる悲しさよ。
ほむる姓の柔和をも、
愚かや異鄕の仇と怨ト、

鳩に似たる胸の血の
恐れに凝るやと心なやむ。

汝が行く路の夕暮、
遠き京の方知らず、
磧に冷えたる石に伏すも、
絶えず祈りて地に呼べ。
和讃を誦する心は
枯野を變ゝて花に飾り、

沙漠越ゆる人の子が
青きを認めし思見する。

高き臺ものぞまゝ、
薫る衣も願はず。
蹉跎たる此世の長き旅に、
いばら、薊の路より
吾子ひきたき許りぞ。
行きしは巡禮、この夕暮

哀情切に泣くとも、
冊戸にすがりて指は噛まず。

暗夜樹蔭にたちて

人香なき間の手がらみ、
陋象沼の葦に立ち
伏目にけぬるき水をまもり、
半夜現形に凝る頃、
倚るは櫟の木の暗、
依々たる夜の氣額にふれて

呼吸切に塞ぐまで
惑へる心をなやましむる。

天路走る流星の
遠き方に入る如く、
運命そびらに吾をのせて
行方那邊と知る可き。
死と夜と闇と恐怖の
跌める未來を思ひやれば、

疑胸に亂れて
現當いかにと分ちがたき。

香吹く日の曉、
谷間くゞる水に似て、
幸ある姿に歌ひ行けど、
ゆくて柏の木がくれ、
淵に落つる宿世なり。
來し方快樂の情をこめて

日毎誦したる唱歌の
いづれか挽歌の調ならぬ、
木精も眠る眞夜中、
花に伏せる若人の
悲しきかたちを星は見るか。
疑解せぬ地の上、
詩歌、懸想領あんりや、
清きは絶えたる土にたちて

理想も何の力ぞ、
われ今現世のいのち咀ふ。
運命人を痛めて
この歎きに歩ましむ。
願ふは死の手か、希望なくも
常の平和其處にあり。
罪と汚れの酬、
人の子吾名を忘れ去るも、

高くかゝる星に似て、
榮ある座を享けぬべきぞ。

鐵幹君に酬ゆ

與謝野鐵幹君、拙著暮笛集をよまれて

さはいへ同じ寂しさを
こゝにも託ぶる若き身の
君が詩集をふとこころに
涙せきあへず打なげく哉

と結びたまへる一篇の詩を寄せらるるのかへりにとて斯くは

夕暮吹ける牧笛の
耻づれば音も細かるに、

君聞けりとや、優しくも
涙にまみを濕らせて。

由來才なき人の子が
憂慰めの遊びぐさ、
嫉妬ある世にこは幸か、
人延くほどの音も吹かず。

然りな、野川の鶺鴒の
無心のふしに似る可きを、
憂しや、吾世の曉はやく、
怨みの調を覺え得て。

物に感じて伏し沈み
薄き緣をかなしめど、
手相あやしきこの子には
禿筆ならで得られんや。

遂には飲げし瓶子より
したゝる酒をうち嘗めて、
これ趣味ありと盃の
圓きを厭ふ物狂。

君は有心者、市に行き
袖はころびて歸るとも、
説くな吾がため、塵の世の
忌むにも過ぐる爲體。

煩ひ多き世を避けて
いま詩の領に甦る、
娶らず、嫁かず天童の
潔きぞ法と思ふもの。

髪のほつれを厭はんや、
唯興來の幸なくて、
石を拾ひて玉と見る
智慧の惑ひを歎くのみ。

あゝ詠草を火に附して
地に一くだり殘さずも、
有情の心、詩の神の
若き僕と呼ばればや。

悲みながき身に倦みて
寧ろ牧場の牛の群、
智覺なきをば願ひては
深野に泣くも斯かればぞ。

鵝、三十日經て野の水の
清き調べに似るものを、
歌へば吃る人の子の
生命の價君知るや。

あゝ詩の神の寵ありて
警策一首成らん日は、
黑く染めたる吾生の
暮落つる期にあらでやは。

せめては許せ、甕一つ、
泡咲くものも啜らでは
餘りに胸の冷えゆきて、
笛吹く息も堪へざるに。

聞けば秀才ら君を推し
都に詩歌の集會組むと、
譽ある名を身にうけて
桂の冠ながく得よ、

君が守る園、ともすれば
花の蘂はむ蟲見るも、
蛇に路のく人の子の
心弱きに似るなかれ。

君は先生、情あらば
吹く術解せぬ人のため、
色くれなゐの唇に
先づ歌口を含まずや。

さば夕ぐれの一節を
森の小路に吹きまねて、
牧場がへりの野の人も
脚の疲れを慰めぬべく。

小鼠に與ふ

大阪に來り友金尾子の家に寓す。眞晝水のむとて井戸に行き、小鼠一つ倉の邊りにさまよふを見てよめる

厨女皿を灌ぐとて、
水吹く管を開けしまゝ、
戸に凭る頃を窺ひて、
出でしや、鼠穴の巣を。

窓洩る光ほの暗く、
粉曳臼の上に落ち、
人の形を映すとも、
怖るゝ勿れ吾友よ。

倉にこぼれし米ありて
三粒の糧に厭きたりや、
去來足並小躍りて、
快樂孕むと疑はる。

物蔭づたひ往きめぐる
低き姿を眺めては、
誰か夜に盛る盃の
底の藥を悔まざる。

田に米蒔きて稗得しや、
米獲て倉に滿たざるや、
人地の幸を思ひ見ば、
鼠に糧を惜まざれ。

壁の壞れにくゞり入り、
脚そばだてゝ何を見る、
胸に小さき智慧ありて
世の成りゆきを觀ずるか。

あゝ詐欺に身は疼せて
爭ひ多き市の上、
影にも堪へぬ鼠子の
清き目を引く價値ありや。

聽け君、穴の暗きより
『きき』と物嚙む響する、
今人の世の耻なきに、
鼠なくやと吾惑ふ。

自然に依りて足る可きを、
人營みて何をする。
嚙むに故あり、願くは
神この穴に平和を。

あゝ鼠子よ此處に來て
暫しは吾と共にせよ、
誰が手か、倉の白壁の
鳥羽繪に似たる笑をば。

低唱

若き女の歌ひたる曲

君ゆく路のかたはら、
草に點ずる花見ば、
家に寄する女は無くも、
手折らで去るな旅の子。
運命吾を痛めて、

若き懸想を碎きぬ。
野の花手にも折られで、
朽ちしに是や比すべき。

頸にかゝる髪には、
鼎揚ぐる力あれど、
詐り多き男を、
繋ぎよるに長足らず。

形圓き石垣を、
燃ゆる胸にかき抱き、
慰めも無き怨恨を、
消すとすれど甲斐も無う。

媚に疎き唇を、
乳より白き齒に嚙みて、
ながく走る吐息の
色紅となる迄も。

さまよひ

あゝ戀人の手に凭り、
野路を行くは誰が子ぞや。
くくと呼ばふ鳩に似て、
脚は輕く草ふみぬ。

薫り深き唇の
くちづけだに堪ふ可くば、

戀ふる仲と誰か知る、
唯妹と君を見て。

野守の鏡越えずば、
肩になびく汝が髪を
胸に捲いて歩むとも、
己れにして耻はなし。

圓は珠は失せがちに、

懸想の羽疾かりや。
左、胸の上におき、
右、やはらかに抱きよる。

野路の粟赤らみて、
味はふべく樹に懸る。
あまりに胸の渇くに、
枝折るひまを許せな。

君にねがふ野の守、
木暗に聲を聞くとも、
情ぞ、路を離れて、
吾等の夢な覺しぞ。

夢路の関守

甘き眠君に落ち、
玉手曲げてまどろめば、
手に桂樹の鞭とりて、
寄るを叱り夢路守る。

君めざめて唇に、
密ある笑を見ん迄、

戸に立ちて訪ふとも、
何條こゝを去るべきや。

市女呼びて香油を得、
長き髮の毛に塗るや、
興味得たる繪匠の
絹に刷毛を揮ふやう。

夕、君と抱く時

移り香深く薫ドて
快樂たける宴會の日、
友羨む身とぞなる。

沙彌がうたへる歌

華籠に盛れる木蓮は、
香爐の灰冷えしまゝ、
脆く落ちて行春の
ながき愁を止めぬ。

深く責めな春の日を、
鐘撞男花に醉ひ、

時の數を忘るとも、
そは笑ふべき罪なり。

詣でゝ歸る子を呼び、
春の齡を問へるに、
君も見よと羅衣の
袂ふりて急ぎ去る。

今、鐘樓に攀ぢ上り、

遠く浮世を望めば、
百里途もつくる方、
春はかなく落ちんとす。

あゝ若きは酒くみて、
甘き夢に興がるを、
獨り冷えし堂に入り、
破れし帙簀をや解くべき。

願ふは、魔よ毒さして、
才なき石と變せよ、
さば永劫朽ちもせで、
春戀石と名を得んに。

絶句

小狐

忘たる僕を切に呼びて、
書の間籬を固く結へど、
人なき折々しのび入りて、
小狐春の夜鴆をぬすむ。

一夜は宵より庭をめぐり
三たびか鞭もて追ひしものを、
夜ふけて林蔭の下葉がくれ、
守る身も忘れて夢に入れば、

此は又、下枝の風にのりて、
語るよ、小狐聲も低く、
丹見ぬ闇路を庭にかくれ、
人の子戀ひ行く汝が身なるを。

雛鳩與へよ、否といはじ、
翌くる夜鳴かんか、君が影に。

泉

樹蔭の泉に誰を見てか、
可憐や、少女水も掬まず、
顔うち赤らめ疾く去るとて
水甕碎くな、道は狹きに。

夏の日山路に九里を馳せて、
都の旅人渇きたるに、
顔よき少女よ、情あらば、
せめては投げても柄杓貸せよ。

湧き散る泉に深く掬みて、
重なる歎きを忘れ得なば、
水甕抱いて君と共に、
吾世を榎のかげに老いむ。

あゝこの泉とわが情と、
共にし掬まんは幸あらずや。

桃園

隣りの桃園木葉しげく、
人目を忍ぶに頼りありと、
曉、木の間にかくれ入りて、
往來懸想の歌をつくる。

詩の名は、『岩根の戰爭談』、
落武者郷士の姪に懐き、
夏の日、兜の矢目を指して
當時かたると言ふにあるよ。

句を切る手拍子六度ふりて、
今猶矢さけび興にのらず、
小道の逍途爪を痛み、
足悩み立てども歌を見んや。

遂には口癖、疲れたりと、
葉がくれ熟せる桃を盗む。

惡縁

何等の惡縁、市に立ちて
媚ぶるに堪へざる弱き性、
文集興がる癖もなくば、
身を切る痛みを胸に得んや。

時成れば終日窓に俯して、
かや、寂しき笑に入れど、
佳き句も嚙むべき味はなきに
家刀自怨ドて戯を訴ふ。

金鴉は忠實なる雛を産めど、
詩人は子の縁無きに似たり。
覺らば夙くより鋤を負ひて、
百歩の圃に勞す可きを。

許せよ瘠せたり。君を捲いて、
泣くにも堪へざる腕なるに。

怜人の歎

厄丁厨に鶏は割けど、
君子の團欒に席を得んや。
似たりな、怜人、笛を秘めて
今日より無禮の前に立つな。

凡俗威を振る胸のうちは、
美き音が借るべき宿ならず。
譏刺の附子矢を背に負ひて、
歸る日無くんば幸とすべし。

流人の名を得て家を離れ、
饑えては野末の石に伏すも、
市女が扉のかげに寄りて
吹かんや、媚ぶるに笛は帶び

笛には譜あれど、不如意なりや
此世に吾等の領はあらず。

遣愁

斯くては布衣の子入洛何日か、
海棠哀れに花は笑めど、
惱む身いま又胸を痛み、
無常に感ドて頭くだる。

夕暮驛路に酒を嘆びて
欷げたる盃口にふくみ、
賦するは『遣愁』、歌は成れど
藝苑いつまた吾を入れむ。

醉うては破れし窓にもたれ、
倦ずる童子の形に似るも、
執着去らざる道はあるを、
暫しも反古をし忘るべきか。

火影の低唱、眉をとおして
痩せたる詩風に泣くを見ずや。

遠情

今宵は金星青味帶びて、
射る影寂しく胸に入るに、
戀ふる子遠情忍びがたく、
流れの邊りに啜り泣くよ。

毋戸にもたれて指を噛めば、
少人感じて山路かへる。
今手に動ずる胸を押して、
聲呑む悩みを誰し知るか。

行く路難ある旅の空に、
黒髪ながき子何を思ふ。
情ある男の腕ならで、
夜の夢たひらに守り得んや。

手枕やられし恨みあらば、
誰が罪、吾かや吾は知らじ。

遣憤

九首

一

國歩やうやく惱ましきに至り
亟相かくれて湘南に入る、たま
たまこゝを過ぎてよめる

狐に巣なしと誰かいふや、
人見ば逃れて窟に入るを。

譬へば亟相彼に似たり、
困せば屢こゝに隱る。

民皆足惱む時にありて、
舘に女を見る耻とせずや。
身はこれ布衣の子、門をよぎり、
足ずりもがいて君に惜む。

若し神職分に忠實を見ずと、

名折をむくゆる事もあらば、
憂い哉、千載魂は落ちて
名譽の關所は君にあかず。

丞相起たんか。訴ありと
雜人階下に充つと聞くに。

二

地租增徵案の事ありしよりこの
かた、政界賄賂公に行はれて道義
全く地に落ちぬ。罪は斷じて其原
に歸すべし。

丞相何として無禮なるや、
路墾りなやんで泣くもあるに、
名聞買ふべく民をはかり、
險しき方にぞ惑はしむる。

往くもの責あり。これに比して

誘ふは倍する罪ぞ負へる。
罪なほ厭はど、怖るべきは
歴史を恥辱の影とせずや。

陥り易かる民を擧げて
死と夜の領なる窟にくだり、
永劫消えざる焔あびて
三世の裁判をうくる時ぞ、

喜べ亟相、冥府の門に、
先づ身を燒かれし名をば得んに。

三

民衆の信仰落ち、道義すたれて
風俗日に頽れゆくを、教導の任
にあるもの關はり知らざる如き
ものあるは何故ぞ

粘土の子凍りて息は無きに、

天部の火を借り燒くとせずや。
先生早くも道に倦んど、
皷吹のつとめを忌むに似たり。

斯くては渇仰土に落ちて
民みな歸するによるべあらじ、
神人禮する風儀成りて
何の日新代こゝにつがん。

枯木に花咲く時はあれど、
信なき衆生は榮え得んや。
我執と野鄙の流布に堪へで、
自から滅ぶる、幸とせんか。
厭ふは懈怠よ、友を延きて
首の座令ずる果ぞ見する。

傳道のつとめに在るもの、教祖の
いましめを忘れて、只管に俗衆の
意を迎へんとす、うれひて咏める、

願ふは清狂、市にゆきて
童子の笑を身には買ふも、
足ぶみ、手拍子調を切りて
詩歌の入興に醉ひぬべきを。

何の意、僧正道に惑ひ
大なる門より民をひくか、

遂にはまめ人見るに堪へで
沈淪の直路と敢へて呼ばん。

地の事不斷に似非に入るを、
朽つる名買ふべく民に媚る、
愧ぢずと思ふや。筆を投げて
道には殉ずる人もあるに。

凝る可きつとめに勞を見ずと、

詩の難、今の日むしろ享けん。

五

節操たき議員のもとに地租増徴
案の成るや素朴なる郷里の民も
激する所あるに似たり

暁、若者鋤をふりて
山路を走るに故を問へば、
野兎一匹麥を噛みて
逃げきと彼方の荊棘指すよ。
暗の夜、洞窟の饑に堪へで、
兎は三坪の麥を踏めり。
知らずや山賊吾も知らで、
五百代小田なる稲穂刈るを。

そは君、闇浮の路にまよひ、
隣を欺き、友をはかり、
朽ちたる築地の影によぢて

位を、富をと呼べる痴者ぞ。
兎は追ふ可し、痴者は打ちて
罪ある汚れの跡を絶てよ。

六

夕暮賤の男門に立ちて
可憐や暫らく恨み泣くよ、
『われ歳六十老に入りて
生命の苦痛を今宵知りぬ。
吾子は三歳を衛士に撰られ、
百歩の桑圃草に荒れぬ。
今手に鋤とり畔にたてど、
あゝまた壯なる田子に非ず。
村長昨の夜人につてゝ
租税をいそげと切に言へど、
厨に菜もなく饑えし子には、

數錢の貯へむしろ夢』と。
これ詩ならんやは、喘ぐ牛に
季を知る亟相今は無きか。

七

かの政客といふもの恣に民の血を絞
りながらまた遊説と名づけてこゝか
らこを驅けまはるいとあさまし
僞善者來れり、蠟を塗りて
諸耳ふさげよ、然らであらば
蜜ある言の葉内に入りて
耳だれ患ふる時もあらん。
見んともすべしや、道に厭きて
靈魂くもれる顏の色を。
戸に來て訪へども人は開けず、
野に行き呼ばへど神は聽かず。

宿だに貸せとや、竈の前に
偽り多かる人を延きて、
妻子に見せんは耻と思ふ。

今野に守りの絶えて無きに、
なう來よ若者、夜頃訪ひて
葡萄を盗める狐を追はん。

ゆうべは山田に水をそゝぎ、
勞れて結びし夢路淺く、
曉方ほと〳〵門をうつに、
開けば旅人二人たてり。

巫子と名のるよ、弓をふりて
諸手の不思議を稱へいへど、
吾今心に平和ありて
死靈の怨を聞くに堪へず。

巫子よ教へん、弓を折りて
今日より吾等の門に立つな、
其は唯罪なり、清き民の
惑ひを招くと常に聞くを。

巫子よ疾く去れ、吾はおりて
かの田に生ひたる莠ぬかん。

九

夕飯のむしろに瓶子そへて、
疲れを忘ずる濁り酒の
快樂ぞ、民には驕奢なりと、
盃うばふを誰と知るや。

まめ人慣りて優しき目に、

怨ずる涙をふるふ夕、
審判ぞ下れや、力猛に
血を見で止まざる酬あらん。

見よ、荷を奪ひて走る者は、
重みに堪へずや路に倒る。
あはれは痴者、これを知らで
わが身の墮つるを急くに似たり。

サタンも斯くこそ。民よ賴め、
善いかな霄壤道は絶えず。

（遺　憤　畢）

罪

『夕ぐれ集會あり、堂に上れ、
先生きたる』と示あれど、
身ひとり樹蔭に隱れ入りて
懸想の痛みを忍び泣きぬ。
素より成道興にあらず、

願痛せても祈るべきを、
若きぞ罪なる、人を見ては
無着の心を得るに堪へず。

聞け、今讃美歌堂におてる、
世の路よけたる報ありて、
友みな行功幸を見んに、
信なき身のみは罪に入るか。

罪をも厭はず、人もあらば
凭りても泣かんを、人も去りぬ。

うたげ

春の夜うたげの蓆ながく、
醉ひしや、主人は眉をあげて
語るは掛想のむかし談、
盃ふくみて聞くもあるよ。
賓客、家の子、入興ありて

吾にも許せと口を細め、
顔よき少女子近う呼びて、
半らは盡きたる瓶子とれり。
福田われらの願ならず、
腕の白きに凭らば足りぬ。
味よき軍を緣と見よと、
家の子みづから足るに似たり。

あれ見よ、少女は恥に醉ひて、
うけたる盃膝になげぬ。

戀の矢

祈年祭のさむき夕、
羽ある神の子狙ひ得しや、
戀の矢心臓に傷を穿ち、
疼みにこらへで吾ぞ病める。
弱胸わづらふ、誰によりて

小さき平和の手にもすがる。
かなしき調を口に誦して、
みづから慰むつらきものぞ。
懸想と詩歌を酒に組みて
若きが醉ふべき三の小壺、
趣味ある友とは誰かいふや。
苺は熟して市に入れど、

吟身いまなは愁帯びて、
わが詩は宴會の興にのらず。

夏の白晝

野苺の葉がくれ光よけて、
蜥蜴も眠れる夏の眞晝、
靜かに南の窓にもたれ、
黒髪ながきを思ひ慕ふ。

をりから牧童笛を吹きて、

無心の調子も情に入るに、
遂には得堪へず庭におりて、
木闇の小路に隠れ入りぬ。

あゝ野の小羊水を飲むと、
ぬるめる流れに走る頃を、
似たりな、わが身も心餓ゑて
運命孤なるに啜り泣くよ。

年齢の若きぞまことと幸無
晝、夜感ドて愁たゐず。

謎

男の心臓と桃をもりて、
小皿を少女の膝にかけよ、
白き手触るゝは此方ならで、
片頬の紅める甘き木の實。

植ゑなば木の實も芽をば吹いて
ぬくむる光は感ずべきを、

掛想の鍵にも開きがたき
女の心ぞかたくなゝる。

あかつき花吹く園の繁み、
天女の石彫、顔は似るも
永劫燃えざる胸に似なと
言ひしは誰が事、人も知るや。

君にと投げたる謎は解けで、

ことしも寂しう春は暮れぬ。

歓獻

邦に慶び事ありける日空を
仰ぎてよめる

歡喜の音聲そらに響き、
巖戸にひきたる幕を搖れば、
故はと、天人雲にいでゝ、
樂所のかたをぞまもり見たる。
下には萬民酒をくみて、

幸ある斯日の祝詞かはし、
夕はちまたに松明ふりて、
光榮はこゝにと狂ひ呼ばふ。

美いかな、本性今ぞ見ると
嘉すか、天人令旨うけて、
雲みな國見の臺をはなれ、
灘經て二千里遠く去れり。

あゝよし照る日を顏に浴びて、
吾らは祝宴に興じ得んよ。

あゝ杜國

（絶句十篇）

十九世紀末の歴史に世にまたと見る可からざる光彩を添へたるは英杜戰爭なり。この小さきを以て彼の大なると爭ふ、果は知るべくして而かも義しきはまぐべからず、民を擧げて邦と共に斃れんとす。これを思ひて感慨なからんや。絶句十篇をつくる

一

類なき似而非者チエンバレンの
破壞には長けたる力厭ふ、
横さに歩むは蟹に見しが、
この子も直路をたどり行かず。

斷頭臺王者に植ゑしところ、
今はた義ありや、吾は惑ふ。
塵穢の頭人たかく揚げて、
無禮を許すに何の名ある。

あゝ世に誠の情足らず、
孰れか大衆の民をひきて、
本性高きに導きつゝ、
歴史の光榮をつくり得しや。

形の化粧に心醉ひて、
總てを捨つるは幸無いかな。

二

不毛國拓いて百合を植うる、
隣りに何等の家損ありや。
百合花開いて手折るべくば、
籬を擴げて領を論ず。

足音に逃れて去るを見れば、
狐も小さき耻は知りぬ。
白晝に物剝ぐ人の子らに、
基督あがむる名を許すや。

審判は御空の高きよりか、
はた地の心の清きよりか。
永劫世を見る神の前に、
運命を令ずる道の前に、
義しき名を得し跡を知りて、
譏刺の歸するを分つべきに。

三

議會に立ちたるクルウゲルの
憤れる調子を耳にせずや、
『敵あり、天父の知れるところ、
戟とり勇みて往かざらんや。』
強きは戻道旗にあげて、
弱きを虐ぐちからありや。
弱きは壓るゝ時し有るも、
權にほろぶる『道』はありや。

領土の存亡今は言はず、
わが前義と名と踏れんとす。
犠牲要する何の時ぞ、
世をして總てを忘れしめよ。

善いかな、『天父のしれる所
戟とり男みてあらがふ』と云ふ。

四

この邦富めるの故を以て、
忌むべき葛藤の斷へずあらば、
ヨハネスブルグの路を塞ぎ、
金堀る眞洞を土に埋めよ。

荒金眞金のたより無きも、
人の子絶えんや、斯る時ぞ、

思想の高きを胸に探り、
世路の清きを歩み得べし。

護るべき任ある清き民の
平和を亂すは何の國ぞ、
基督の民、―基督の領―
自ら稱ふる耻ないかな。
大なる掌こゝに下りて、

人業こぼたん日をぞ祈る

五

チエンバレンのすがた繪を見て

一語に答へて足りぬ可くば、
汝を知らずと敢て言ふよ、
冷嘲帶びたる顏の色は、
正路を踏む可き相にあらず。

宗教の秘密はクルウゲルの
銹びたる額に眺め得たり、
汝が顔より拾ひ得るは、
獣物に能く見る無情のみぞ。

鵝に群れ居る鳩は下りて、
馴れざる水面を踏むといへり、
似而非者幾つを見まく欲りて、
民衆後方に高く呼ぶや。

この子を崇むる邦の不幸、
石階拜むぞ寧ろまさる。

六

杜國の軍務總督ジュウベルト將軍ことし三月廿八日を以て逝りぬ、死する時枕をあげて『愍む可き民よ』と嘆じけりと聞きて、

死の手に延かれて去るといふも、
邦の名今なほ忘れ得ずや。

將軍目を瞑ぢ嘆じけるは、
『愍むべき哉國の民』と。

惱むな、孰れの孫かありて、
バアルの流れを横に過ぎり、
自由の領土を拓き得たる
歷史の名譽を汚すべきや。

あゝ吾、南の共和國の

榮ある敗軍を聞ける毎に、
思ふは流星、遠く飛びて、
天路に隱るゝ淸き姿。

消えしはこれ有り。然はあれど
いさはも光を闇に曳きぬ。

七

白髯丈あるジユウベルトの

言葉ぞ雄々しや。人に言へる、
『軛を頸にかくるあらば、
誰が手が劍に拂はざるや。』

自由よ、生れて何の幸ぞ、
汝が名は掛想の人に似るか、
聽いては將軍こゝろ勇み、
鐙に跨ぐを辭せずといふ。

知れりや、南方清き邦の
柱ぞ『自由』の石に立てる。
礎ぬかれて忍ぶ可くば、
國の名掲ぐる理由あらんや。

自由よ、壓るゝ時し來るも、
護る可き手あるを神に謝せよ。

大風船吹く海を超えて、
南に五千里、遠きかなた、
民みな禮ある共和國の
現狀かもうて心痛む。

戻道のけぞる世とは知れど、
『清き』ぞ餘りに力なくて、
再々行手に伏すを見ては、
誰が子か惑ひに沈まざるや。

左もあれ、無類に清き民の
罪無き死骸を沓にしても、
汝が名を呼ばでは堪へ得ずや、
勝ちたる軍ぞ不幸なりな。

敵手の忿怒は壓へ得べし、
歴史の汚れは何日か消ゆる。

九

杜國大統領クルウゲル海を超えて歐州に航すとの報を得たる時詠める

海神願はく肩を垂れて、
この日は諸手に浪を搖るな、
大なる靈魂傷を帶びて、
白帆を揚げたる船に伏せり。

吹き散る海の香顏を打ちて、
『南の回歸』に落つる所、

不幸のうまれよ、民惱むと、
王者（クルウゲル）は老いたる額を垂れぬ。

あゝ彼の尊き御名に依りて、
義しき叫びを野に揚ぐるも、
白色人種に答ありや、
世の道まことに非違ぞ多き。

思へば情ある白帆なりや、

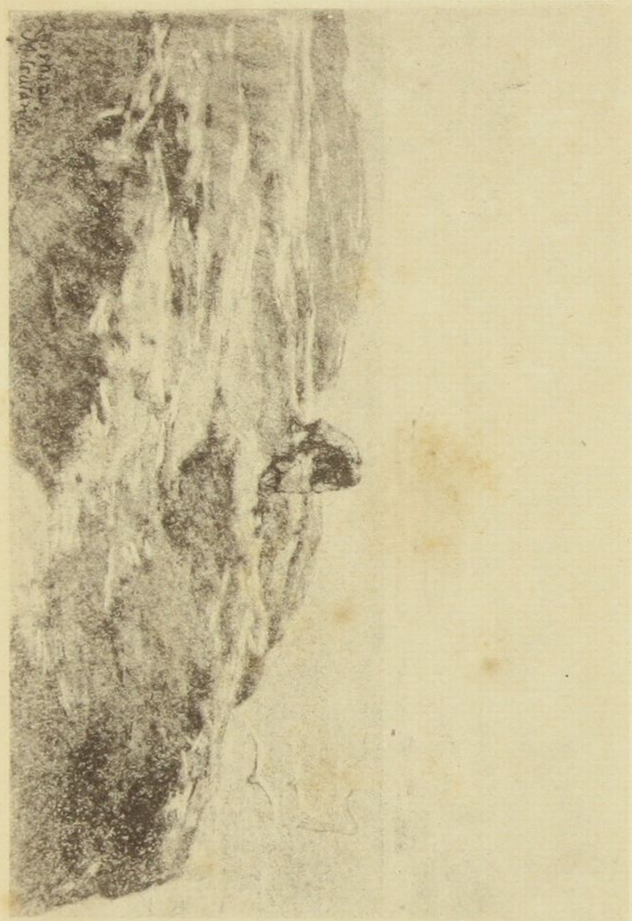
流人を擁いて海に避けぬ。

十

地圖ひく人の子心あらば、
バアルの左右なる邦の色は
小指の血に塗れ、非義と打ちて、
眞實人三萬こゝに殪る。

いまの代未來に傳ふ可きは、
蒸氣と電氣の智慧に非ず、
バアルの左右なる邦の姿——
消ゆざる汚辱の跡に有るよ。

博士は宗教を弄ド去んぬ、
天意は二樣に說くを得べし、
斯くては世の事淸き子らの
悲しき呪詛を價ひせずや。



あゝ人何時まで闇を蹈むか、
まどひぞ永劫天に歸する。

（絶句畢）

巖頭沈吟

相慕ひける男女ありけり、月花の遊びにつけてかたみにいたはる事並々ならず、心なき友だちか嫉みの噂絶にける日もなかりしが、ふと誰知れず女海こにて日向の國へと去りぬ、其ゆゑよしを知る人なし、男歎きに堪へず思ひくしたる風なりしがつひに女が航したる港

の波止場より海に投じて身をなく
しぬ、男は詩歌の道に滋からずゆ
くすゑは騒壇に立ちて名聞を博せ
ん望みあり、自らも爾かねがへり
しを惜みても餘りある事なり、女
はた書よみて道をもわきまへたる
を如何しけん男の身の果をも聞き
しや否や、孰れも名を厭ひてこゝ
には掲げず。　卅二年十一月

一、なげきの卷

空藍色に晴れ渡り、
波ゆきかへりのたくる日、
よるは巖かげ海の香の
籠りて玄めける洞の壁。
水平線に尾を垂れて、

雲薄色に曳くほとり、
心自然にあくがれて、
市のどよみは遠ざかる。

倦んずる童女母により、
野の戯れを玄のぶ如、
今海ながめ、追懐は
遠く去りたる人の上。

その子餘りにつちかりし、
慕へる吾を後にして、
白帆のかげに身をひそめ、
波のかなたに往きしかな。

干潟に落つる貝の葉に、
盛るべき程の情あらば、
低き波止場の舟よそひ、
手招すれば足るべきを。

往きにし方は何方ぞと、
巖にのぼりて眺めしも、
波路のはては灰色よ、
涙ながれて見えわかず。

せめて慰む術もやと、
歌に心をかへせしも、
背きし罪か詩の神の
賛けありとも思はれず。

笛の手何か、きよき音は
安き身にこそ興を見れ、
人を怨みて動ずる身、
唯泣かしむる節ばかり。

日向の國よ草ふかく
露しげき野と聞きにしが

君はいづくをさまよへる、
和手懸くべき肩ありや。

あゝ聖い哉、天の上、
戀知る女神詩をも知る、
女こゝろを委ねんに、
歌人なにか足らはざる。

歸れ戀人、唇は
胸の焔に渇きたり、
君かへりこむ其日まで、
また花びらに觸れもせど。

鳴くを引汐かちゆきて、
再び島にかへる時、
浦に鴨見ぬ恨み得て、
悔ひずや、君は永久に。

身は眞實男、人の世の
咎の花の血を染めて、
世に入る門の戸の羽に、
怨恨のあとをしるさせな。

胸のいたみに堪へかねて、
足音低く歩みより、
獨りひめたる君が名を、
干潟に深く書いて見る。

あゝこの文字の永劫に、
消えゝと聞かばわが戀の
足らんを、若しや夕潮の
頭もたげて寄せもせば。

歸れ戀人、唇は
胸のほのほに渇きたり、
君かへり來むその日まで、

また花びらに觸れもせど。
夢か、會うてはかき擁き、
人憚りの接吻に、
戀のうまさに醉ひたりと、
そと囁きて笑みし日は。
戀する人に健忘と、
つよき心臓を與へずや。

いま悲哀に、過ぎし日の
快樂おもふに忍びじよ。
不幸なる哉、白き手に
詩の清興を捨てしより、
名譽まれなる桂の葉、
とはに頭にまとひ得ず。
いま又君を失ひて、

戀の盃　覆へる。
かくて人の世匕首の
氷れる肌に足らんのみ。

手負の鷲の巣にかへり、
翼を嚙みて鳴く如く、
巖にすがりて咽び入る
男ありとは知るや知らずや。

二、のろひの卷

見よ龍宮の反り橋か、
なぎたる空に虹かゝる。
人まどふ世に何の榮ぞ、
二つに裂けて海に落ちよ。

そら地と絶てよ、上に星、

下に野の花、なかに戀
神の飾りと聞けりしを、
人の花まづ碎けたり。

殘るは富に、智慧に、名に、
言葉に、道に、僞りに、
宗教の疲れ、盲の理――
足りぬ、汚辱の帆章よ。

潮の香揖にけぶらせて、
舟漕ぎかへる鰹魚釣、
海幸いかに多くとも、
人待つ岸に繫がされ。

平らに見ゆる妻の胸の
底の淺きにくらべては、
花藻のうかぶ淵の上、
涙はありとも住みやすき。

われは隱れ家こぼたれて、
賴る方なきひとり兒ぞ。
昔の榮の追懷の
鞭いたらぬは、——君よ死か

あゝ悲みの人の子に、
死は故鄕の思あり。
あゝ望なき人の子に、

死は整へる姿あり。
胸もあらはに衣裂きて、
濃青の淵にのぞむとき、
母の腕による如き
安きおもひのなからずや。

あゝ可憐なる女子に、
千歲とけぬ呪咀あれ。

男契りをやぶられて、
若き生命をうしなふよ。

あゝ可憐なる女子に、
千歳とけぬ呪詛あれ。
男癒えざる傷を得て、
清き心を葬るよ。

かつては白き指觸れて、

愛と詩の家と戯れし
胸絶壁につきあてゝ、
皮膚くぢかん時ぞ今。

かつては腕やはらかに、
わが寶ぞと抱きたる
額大浪に洗はせて、
潮に沈まん時ぞ今。

知んぬ、情ある女子は、
いまはの人の恨みをも、
なほ縱琴の空鳴に
似ると傳ふる耳もてり。

見よ、王法をやぶりし子、
白き額をうなだれて、
斷頭臺にのぼる如、
吾立ちあがる巖の上に。

吾立ちあがる巖の上に、
涙は雨とあふれ來ぬ、
死を怖れんや、顧みて
あゝつれなきを戀ふればぞ。

さらば地の神、ながの領に、
顏かゞやきて胸冷えて、
御苑にたてる石彫の

女神に似たる子はなきや。

その裳の裾にひれふして、
報い無き戀泣かんより、
寧ろ無心の牡蠣が身の
巖根の夢を羨むよ。

黒潮よどむ海の底、
戀も詩歌も才も名も、

根なき藻草の一枝に、
花を飾るに足らざらむ。

あゝ海、——龍女罪知らず
眠れる所、弱き子の
唯一の院家、——死の邦の
屯となるをわれ痛む。

海士もし知らばいかならむ、

すなどりすべく來たる朝、
網に死屍を引き揚げて、
臂もわなゝく物怖れ。

幸と糧との家として、
日毎なゞめる潮路に、
身をも沈めし人ありと、
世の運命を思ふにも。

さもあらばあれ、かの虹の
消ゆるが如く、死の邦に、
潮の底に、故郷に
吾は歸るよ——さらば、さらば。

破甕の賦

火の氣絶えたる厨に、
古き甕は碎けたり。
人の告ぐる肌寒を、
甕の身にも感ずるや。
古き甕は碎けたり、

また顔圓き童女の
白き腕に卷かれて、
行かんや、森の泉に。

裂けて散れる菱形に、
窓より落つる光の
靜かに這ふを眺めて、
獨り思ひに耽りぬ。

渇く日誰か汝を、
花の園に交ふべしや。
唇燃ゆる折々、
掬みしは吾が生命なり。

清きものゝ脆かるは、
詩歌の人に聞いたり。
善きも遂に同ドきか、
古き甕は碎けたり。

あゝ土よりいでし人、
清き路を踏みし人、
そらの上を慕ふ人、
運命甕に似ざるや。

古き甕は碎けたり、
壊片を足にふまへて、
心憂ひにえ堪へず、

暮るゝ日をも忘れ去んぬ。

鶯と蝙蝠

春の娘子鶯の
音色うらやむ蝙蝠、
小夜の眠りを窺ひ、
合歡の枝に忍び入る。
緑色したゝる葉ごしに、

圓き胸の血を吸ひて、
去んぬ、月なき眞夜中、
老に似たる後ろ影。

あゝ罪ふかき蝙蝠、
（これさへ神の惠みよ）
夜の守を許されて、
歌も訴へもかなはず。

雲くれなゐの曉、
嫉みも何か、鶯、
尊かりな胸痛せて
なほ朗らに囀ずるよ。

郭公の賦

民集ひて花鎭め、
春安かれと祈る日、
なぎたる白晝に青き海の
遠く鳴るを聞く如く、
あるは惱みの眞夜中、
望みの光りを得たる如く、

今かすかに、明らかに
虛空に鳴けるは何の鳥ぞ。

あら來たりや郭公、
遠く、遠く、また遠く、
心をいざなふその響は、
海棠落つる夕暮、
車駕はせてゆく春の
王子が別れに恨み長う、

血に鳴く鳥の身ならで、
いづれの胸より聞かれ得べき。

木陰地いづる鶯を、
春の小姓と觀せば、
この鳥寵なき若き少女、
行方の西を慕ひて
薄月させる野の空、
友なき天路を走り去るよ。

あゝ峠の幾つ越えて、
なんぢが願ひは癒えぬべきや。

悲しい哉、春の領、
王子ゆいて覆へり、
したゝる青葉の夏のうてな、
權威餘りにさかんに、
快樂夢と過ぎ去んぬ。
知らずや、追懷おこるごとに、

悲みいよゝ新たに、
なが歌ます〳〵清しからむ。

野邊の新樹の葉がくれ、
根白葦の笛吹いて、
みぎはの羊を呼ばふ子等も、
なが音夕に聞いては、
靜かなる世もみだれて、
智識も歎きを救ひ得ドな。

かゝるも何の罪ぞや、
悲哀は類なき清き誇り。

快樂、希望、平和の
よき名弄ずる詩人よ、
なが卷あまりに貧しかりや、
われ疑ひのひとり兒、
和魂つとに煩らひ、
却りて落ち來る鳥の聲に、

人の世知らぬ秘密と、
酒よりあまかる慰籍を知んぬ。

あらゆきたりや郭公、
なが音再び流れず。
詩人の想像の馳するところ、
靈鳥とはに死なんや、
寂しいかな空の上、
野こえ山こえ牧場こえて、

さらば、さらば、さらば鳥、
なんぢの行方へ魂魄まとふ。

野にたちて

森の家より野にいでゝ、
夕の雲をながむれば、
緋威裂けし落武者の
姿に似たる春の暮。

穂の毛のびたる大麥の
畑にかくるゝ笛の音よ
背低き邑のまめ男、
戀のうらみのすさびかや。

失ひしもの慕へども、
再びわれに歸り來ず、
こゝには戀と春の日の
いづれ脆きを問ふなかれ。

畑よりいでよまめ男、
悲しめる者相會うて、
思ひ出語りするばかり、
胸なぐさむはあちゞかし。

深野の路のゆきかへり、
憂きを涙に洗ひ去り、
君が手馴の笛の音の、
新になるを樂しまむ。

かくてぞ邑にかへる時、
春と戀とをうち忘れ、
夏珍らしき朝かげに、
働かんかな、弱からぬ身ぞ。

金絲雀を放つ歌

有情か、鳥もゆく春の
ながき恨みや身にしめる、
今朝金絲雀の悄々と、
鳥立によりて餌を啄まず。
患ひて籠を軒にかけ、

聞いて見よとて笛吹けば、
雌は雄の脊に首よせて、
堪へでや羽もわなゝけり。
寧ろ罪なり、狹き室に、
羽いましめて飼はんより、
放いて見うと籠とりて、
南の窓に蓋あけぬ。

見よ、二羽飛んで梅が枝の
青葉のかげにくゞり入り、
囁くとのみ聞きしまに。
何處とも無く飛び去りぬ。

巣には卵を殘さねば、
鳥は再びかへらんや、
籠を碎きて唯ひとり、
門にもたれて物おもひ。

夕の雲の縹色、
よりて一つに纏まりぬ、
いまその如く金絲雀は、
つがひ離れず飛びしなり。

二羽ある所巣をあみて、
やがて卵と離あらむ。
あゝゆく春の煩ひに、

稍なぐさみて歸り得るかな。

『南畝の人』の小引

『南畝の人』は春耕、夏耘、秋穫
冬藏の四卷にわかちて農民の生活
を描かんとする吾が歌なりこゝに
掲ぐるは其の小引のみ

白羽箙に負ふ射手の雄ごゝろ騷ぐ
陣の前、
戟とり勇む若武者の勝と名譽を傳

ふべき、
高きしらべは彈き馴れず、絃卷き
かへせ詩の神。
罔象童子に變化して野路の宴醉ひ
らく頃、
羊追ひ去る農人の世を咏まんずる
人の手に、
合ふまで優に、和らかに。
銀鋲うてる椅子に凭り盲目の子等

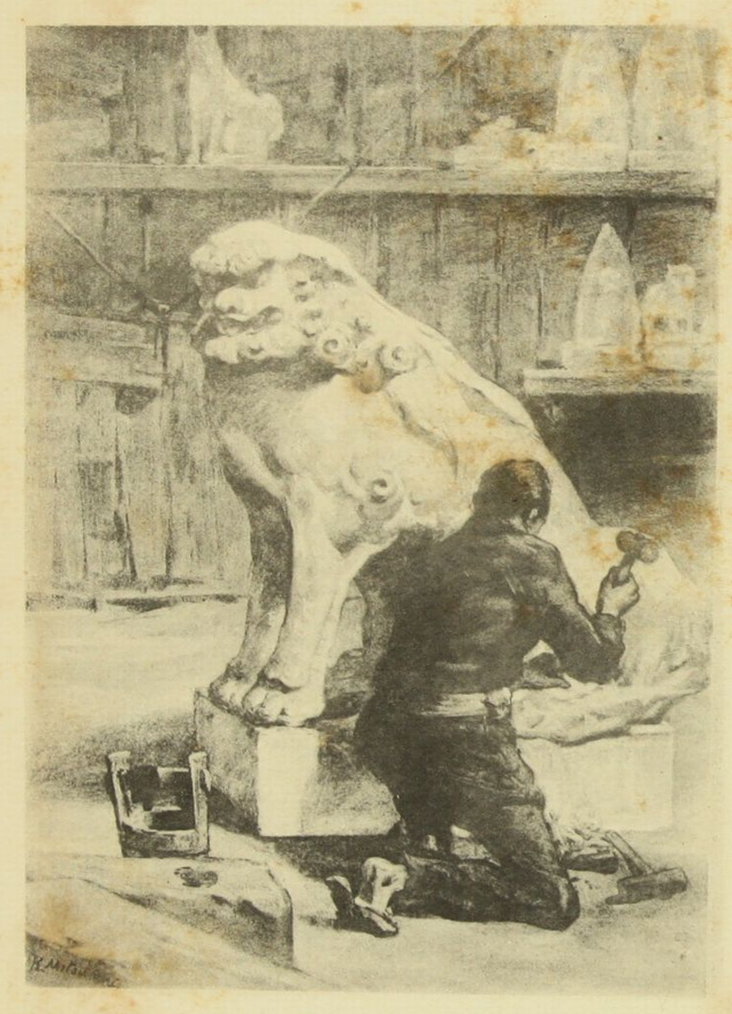
が彈ドたる、
緒琴は朽ちて千歳經ぬ、
野がへり吹ける牧笛の音は極めて
細かるも、
器新らし、試みに古へに似ぬ調子
得て、
珍らしがるも、善しとせむ。
かれ、田の畔に鋤ふる身、名は槇
山の阪越えず、

水を渡りて市座に富める榮ゆる願
はねば、
運命の手に身を委ね、禁ずる樹の
實食みもせず、
隱れ家これを神領と、惡趣の世
避け住まふのみ。
唇氣樓胸にかき、地の譽思ひやみ、
愛も平和も健康も快樂希望も絶
えたりと、

衆生怨ずるなかに立ち、善いかな
種根幸ぞある。
夜は閨に甘き眠を妻と分ち、
日は圃に赤丹穂なる額をあげ、
時に隣人を室に延き、實語りて興
がる日、
醋辛くも睦び合ふ身に歡樂の無か
らずや。
朝夕ふめる牧場みち、草に帶ひく

跡見ても、
顯證ならずや、勞働のうちに隱る
る高き旨。
物の微なるに淺からぬ意の奥を悟
り得ば、
なに將軍の旗章風にかへるをうら
やまん、
羊追ふ子も天の上に同ド愛兒の名
ある民、

知る、耻なくて野路山路、
笛吹き得るを、跨がり得るを。
清い哉、牧者の生計、
聖なりな、農夫の務め、
見よ、東風拂ふ野の氷、氷のひま
の若菜草、
春たちかへり佐保姫の裝束あがる
代となれば、
流れによれる葦の屋の粉屋の軒の



水車、

響きてめぐる時は來ぬ。
老は牧場の垣を結ひ、若きは桑の
圃をうち、
野山にひゞく鄙振に行く旅人の耳
ひきて、
疲勞やすむる、今よりぞ。
かの野の鳥の巣を出でゝ晴れし虚
空に鳴く如く、

古き調をかきすてゝ此の新らしき
一曲に、
詩の愛着をよせてみんかな。

石彫獅子の賦

一

番者に問へば石工は、
木かげの夢に耽りぬと。
入りて小闇き仕事場に、
刻みさしたる唐獅子の
圓き頸を手になでゝ、
誰ぞ、吟ずるは靜やかに、

朽木の柵にすゑられて、
顔くすぼるゝあら彫の
豕、狗兒、野の狐、
さては雄鹿のむらがりに、
こは秀でたる驕りかな、
日浴びて立てる獅子の影。

裂けたる岩に爪かけて、
雄々し、憤るかその姿、

鬣ながく背にまきて、
見れば湧きよる春の潮。
胸はゆたかに力男が
曳きしぼりたる弓の如。
忿怒現ずる明王の
ひろき肩より燃ゆあがる
焔か、ながき尾は躍り、
綿毛密なる脚の裏、

落ちて野薔薇の花ふむも、
巣くへる鳥はめざめんや。
（石工妙ドき心得よ）
瞳子彫られぬ唐獅子は、
光りを知らぬ盲目の身、
鼻かんばしき香を嗅ぐも、
いまだ前脚ふみあげて、
花園小路みださじよ。

鑿の手またく捨てられて、
御苑の夏のあけぼのや、
緑したゝる木のかげに、
巨人の如く立たんとき、
雄姿いかに。背に伏して、
しばし想像にふけらせよ。

二

汝の王者かたどられ、
眞白き石に刻まれぬ。
野より山より林より、
つどへよ獣、列なりて
蹄の前にひざまづき、
弱きを耻ぢて僕たれ。
偉なる靈魂くだりきて、
眞白き石に包まれぬ。

野より山より林より、
つどへよ獣、列なりて
その光輝に浴ぶるべく、
卑き心をなげうてよ。

大なる權威あらはれて、
眞白き石に具せられぬ。
野より山より林より、
つどへよ獣、列なりて

王にさゝぐる燔祭の
聖き火盤を整へよ。

斑の牛と羚羊は、
ふかき痛手に甘んドて、
進みて燃ゆる火に焼けよ。
誇るべきかな、犧牲の
高きほまれは汝にあり、
美む群ぞ愚なる。

見よ犠牲はそなはりぬ、
獅子は額にたて髪の
ながき流れをふるはせて、
あら起ちあがる、『戰鬪と
勝と力の權化なり、
伏せよ、』と呼べば皆伏しぬ。

さかんなる哉、その令や、

自然は死せり永久に、
人は魔のごと强からず、
われは王者ぞ、萬有の
値の源ぞ、煩ひと
悶ゑの胸の主人なり。

あゝ運命の眩きをも、
眼ひらいてながめ入り、
胸わなゝかぬ雄心の

若き勇氣に溢れたる、
勝利のおもひに漲れる、
この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なりと、
聲は喇叭の音に似たり。
時に默止はやぶられて、
たかき讃美と服從は、

雷のどよみに現はれぬ。

三

いま想像の羽たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
豐かにもまた靜かなる
すがた何等の誇りぞや。

石彫ながく傳はりて、

榮となられんは幾千歳、
あゝ藝術は支配せよ、
とはの生命ぞ汝に歸する。

七　く　春をはり

明治三十四年十月三日印刷
明治三十四年十月五日發行
明治三十四年十月廿七日印刷
明治三十四年十一月三日再版

金四十錢

著作者　大阪市東區南本町四丁目三十六番屋敷　薄田淳介
發行者　大阪市東區鎗屋町二丁目七番地　金尾種次郎
印刷者　大阪市東區本町一丁目卅番邸　江間傳三郎
印刷所　大阪國文社株式會社
發行所　大阪市東區南本町心齋橋筋東北角　金尾文淵堂書店

不許複製

汗恵嬉香鶴於

11322

暮笛集

薄田泣菫君新体詩歌集

暮笛集の三版は◎◎体裁を更め工夫を凝らしたる新意匠を以て現はれ候卷中の詩も作者少なからず朱を加へ候ゆゑ自然面目を新たにしたるものの有之候はんと存じ候世の事物の日を經れば陳くなり行くが中に詩歌のみは常に新らしく美くしく候幸福なるは詩集を携ふる人と存じ候まゝ書肆は諸君に暮笛集を勸め候　實價卅五錢郵税四錢に候

三木天遊君作

秋海棠

新體詩集　要目　近日發兌

高山に登りて大河を瞰るの歌（五七）
冬夜郊外に現代をかなしむ（七五）
花言蝶語世はすさまじ（破調七五）
蟲賣り（七五）
秋海棠（七五）
花束（破調七五）
蜘蛛のかけいと（七五）
戀せぬ空（破調七五）
垣ぞひ（七五）
おもひね（七五）
秋そら似（三十一音）
ゆく水の藻外（七五）
なかれ（七五）
ま吟（七五）
ぼろ〻の曲（七五）
白百合（七五）
虹（七五）
かたみぐさ（七五）
雨のゆふ暮（七五）
双晩春（七六）
遠の嘶に（七七）
祭壇の血（破調七七）
とろみ心（七五）
蜻蛉の曲（七五）
閑愁（十音律五七）
淡夢（七六）
培園嘆（七六）
叛花嘆（八六）
陽炎（七五）
きり〴〵す（七五）
連翹草（破調七五）
蛙兒の吟聲（五七、五五）
月憩ふ（五七）
夏の雨（五七、五五）
村雨來れ（七五）
綱の藻屑（短吟集）
灘と磯邊（七七、及五七）
黄葉深處蝶兒の（五七）
遺穀をみて（七五）
江畔の愁思
其他數篇

月刊繪入新體詩集

さく春

第壹集　要　目　十月五日

馬場辰猪　高安月郊
失せたる針　河井酔茗
二羽の鳩　山本露葉
花瓶　三木天遊
かたみくさ　桑田春風
雨の夕暮　蒲田泣菫
少妹　水落露石
山茶花
罪
うたげ
戀の矢
夏の白雲
遊東日記

歐米名畫　（コロタイプ版刷色）
色刷挿畫　（當代名家及青年畫家）

郵税共　金拾五錢

第四版出來

無花果

コロタイプ版色刷口繪製本美麗

中村春雨君作

一條成美君畫

萎靡沈滞せるわが文壇に聊か貢献する所あらんと
の目的を以て大阪毎日新聞が曼に金五百圓の賞を懸け、多く小説募集をしたるは天下の己に知る所なり、尾崎紅葉、幸田露伴三大家の審査に依て第一博士、等に當撰せる春雨氏の無花果也、此作は在來の陳腐なる舊庭園を脱し、社會の人情に突入し、女主人公の温情と家庭に於ける人和と、天地と共に、厚珠の光明と、

一

子弟にもよく熟讀を價値あるかは發兌後數十日にして知れる
小説にもよく熟讀を覺醒せんとす、若夫れ此傑作が教育家も宗教家も窮たるに

金四拾五錢　郵税六錢

菊池幽芳君著

よつちやん

空前の寸珍美本

爲山君意匠表装
金文字及上下金箔引

よつちやんは今年五つの女の兒で著者菊池幽芳君の令孃ですが少〻の虚飾もなく眞率なる温かさ同情の筆を以てその平生を詩的に書れたものでよほど趣味の多い册子です兒童研究に志ある人には善き參考となり世の母たり妻たるものには如何ほど興味深く感じむるでせうか恐らく一度この本を繙いたものはよつちやんの面影を長く忘れることは出來ますまいそれにこの册子の體裁の可憐に美〻しい事はた〻かに出版界を驚かすに足るべきものと固く信ずる處です

コロタイプ版五葉挿入再版出來

金四拾五錢　郵税四錢

角田浩々歌客君文學雜著

出門一笑

金參拾錢
郵税四錢

『老僕とわれ』『野花』『風頭語』『賣花翁』等小品文數十を集め一篇無韻詩といふべきものなり紀行あり『讃岐名勝』の如きは好箇詩趣に富める讃岐の案内記なり『向上一路』『啓行』『勾花』の如きは人生觀のある所を見るべ〻蓋し著者の詩想は理趣に饒むを以て長と〻抽象に過るを以て短とす人生と自然に渉りて一味の詩致感興深きは今日の文壇に在りてまた一家獨得たるを失はずといふべ〻卷末に康有爲の大同大平論あり南海の哲理の一斑を紹介したるものなほ著者が理を好む所を見るべ〻（大阪朝日新聞批評）

詩國小觀

金四拾錢
郵税四錢

『長明、魯望、淵明、屈原嗚呼誰ぞ宇宙は長へに宇宙の外に遯るを得ず』と夫れ然り人間は遂に人寰を脱する能はずといふかコレわが浩々歌客子が仰いて天地萬有の象を觀じ俯〻て人生有情の理を會得せるてふ感想なるに邇〻億ふに人間と〻て富士の山麓に生れたる子は幸福なりき可憐なる『詩國小觀』の一部之をとりて讀み來れば時に崇趣奇趣自ら湧くものあるを覺ゆめり（大阪毎日新聞批評）

坪内逍遙君閲　梅澤和軒君著

菅公論

製本既成　金參拾錢　郵税四錢

本書は菅公論の傳なり所論的確老吏獄を斷ずるが如く其井上高山大町諸氏の所說を批判す縱横所說を批判せる眞に文壇の逸品なり今や菅公の一千年は來らむとす右流左死の眞相を窺はむと欲せば須く一本を座右に備へ給ふべし

新案金蘭簿

芝蘭集

コロタイプ扉　金貳拾錢
色クロス綴　郵税貳錢

信仰、希望、長短、最幸、最非、天然、季節、人物、人品、聲色、書籍、花木、動物、器具、題銘の各欄にわかちて友の面影を一頁に〜のべ〜むる新案の金蘭簿也

月刊俳諧雜誌

車百合

第二卷第二號　金七錢
九月末日已刊　郵税共

掲載要目　筆蹟○俳畫○評論○評釋○文章○雜吟○募集句○地方通信○其他

近刊豫告

中村春雨君作
丹羽默仙君畫

小說

雛鳩

製本美裝

近日美装出版

七日間

極彩色木版口絵釘装美麗

菊地幽芳君作

こゝに最も美にして最も大膽なる
最も狡猾にして最も機敏なる絶世
の一佳人あり六尺有餘の男子一掀
一飜せられつゝ相共に生死の境を
彷徨す讀むもの心膽を寒うせずん
ば止まず讀者を激せしめその最後
まで讀了せずんば安んずる能はざ
らしむるもの蓋し本篇の如きは無
からん

坂田耕雪君畫

金三拾五錢　郵税六錢

歐米漫遊記

川上音二郎　金四十錢
川上貞奴　郵税四錢

漫遊旅行案内

旅行家の好伴侶　金三十錢
製本美麗　郵税四錢

五度摺極彩色繪葉書十二葉　附録

▲松島▲宮島▲裏見瀧▲橋立▲墨堤▲奈良▲大磯▲有馬▲江の島▲住吉▲長良川▲金閣寺

讀書案内

讀書家の好伴侶　郵税共金參錢
第壹號既刊　一年分金卅六錢

掲載要目

○口繪○論説○史傳○叢話○雜録○文苑○彙報○新刊紹介

月刊文藝雜誌

小天地

薄田泣菫　浩々歌客　主幹

第二卷第壹號要目

極彩色八度摺新案四枚續繪葉書畫題…（戀の樂）廣瀨勝平
露伴先生最近肖像コロタイプ版
少女（表紙畫）月（彩色口繪）白露（色摺挿畫）丹羽默仙
初嵐（長篇小說）柳川春葉　獅子檻（長篇小說）中村春雨
復活の街　生田葵山　消夏漫筆　菊池幽芳
偶言數則　中島孤島　こほろぎ　與謝野鉄幹
戀物語　河井醉茗　片袖　鳳晶子
南の園　山本露葉　時文雜觀　浩々歌客
大阪精神病院　松崎天民　旅稼藝人　雨の助
日本觀察談リーラー夫人　俳優金蘭簿　空念坊
戀　募集小品　和歌俳句
初七日の文壇　彙報子　新刊紹介

揭載要目

極彩色繪葉書○口繪○肖像○新作小說○雜錄○文苑○評論○社會○譚園○藝苑○彙報○新刊紹介

材料豐富趣味橫溢

金二十錢　郵稅一錢五厘

第一卷自第壹號十册揃特別金一圓五拾錢